

# 国語科単元展開例の考察

—アメリカ・セカンダリー・スクールのばあい—

奥 田 邦 男

I はじめに

II 国語学習の環境

III 学習活動の進め方

IV 評価はどのように行なわれるか

V おわりに

I はじめに

わが国の国語教育は、戦後、アメリカの Pragmatism instrum-  
mentalism にもとづく言語主義理論の導入によって大きく変わっ  
てきたが、それは押しつけであつたり、一方通行的・無意図的な受  
け入れかたであつて、アメリカ教育の学ばべきところは学び、わが国  
教育の伝統的・国民的な持ち味を生かすという、相互的・意欲的な  
撰取のしかたではなかつたといつてもよい。そのために、アメリカ  
の国語教育の生き生きとした現実の姿、なかでも国語教室における  
学習活動の実際などはあまり知られず、理論の紹介や適用のみが急

がれたために、思考様式や生活様式、国民性、歴史的・地理的・社  
会的背景などの相違からくるギャップを無視しがちになり、その結  
果消化不良を起し、ひいては経験主義に立つアメリカの教育の誤  
びや呼ばわりさえ聞かれようとしている。

ここでは、比較国語教育研究の足がかりとして、アメリカの国語  
教育の具体的な単元展開例をとりあげ、その実態をとらえ、特徴や  
性格を明らかにすることによって、わが国の国語教育をはっきりと  
浮き彫りにし、豊かにしていく一助としたい。なお、ここで「比較国  
語教育」ということばを使ったが、「国語」そのものに対するアメリ  
カ人の考え方は、わが国のそれとはひじょうに異なっていることは  
注意しなければならぬ。広島A・C・C 館長のJ・ホイット氏によ  
ると、「国語」というのはっきりした意識は日本ほど強くなく、no-  
ther tongue」とか 'national language' などといつてもアメリ  
カ人にはなかなかピンとこない。英語そのものが十七世紀のはじ  
め、メイ・フラワー号によってイギリスから移植されたものである  
し、イタリア・ドイツ・メキシコ・中国その他からの多くの移民の  
母国語も手伝つて、考え方によつては、一つの国語というものは存

在しない。」とさえいわれるようである。また、外国文学であるイギリス文学などが、同じ英語国民ということからそのまま読むことができるということも、わが国の事情とひじょうに異なっている。したがって、比較国語教育を考えるにあいに、各国の国語のもつ特殊事情や、国語についての考え方の根本的な相違を、将来当然問題にし、明らかにしていかなければならない。

なお、ここで使用した資料について一言ふれておきたい。周知のように、アメリカの教育の特徴は、わが国やフランスなどちがって、地方分権制と、その内容のバラエティーに富むところにあるが、その学習指導要領 (Course of Study) も、わが国のように文部省から出される中央集権的なそれとはちがって、各州の教育局、各市町村学区の教育委員会などが独自のものを作製している。ここでとりあげたペンシルバニア州の資料、「中等学校のための国語科学習指導要領 (A Course of Study in English for the Secondary Schools)」ペンシルバニア州教育局編、一九五二年版も、州教育局が大学、高等学校、中学校、小学校の先生の協力のもとに、現場の成功実践例を生かして作ったものである。単元展開例としてとりあげられているものには、つぎのようなものがある。

- (1) 「マンガよりけましなもの」 (第7学年)
- (2) 「ニュースができるまで」 (第8学年)
- (3) 「マスコミの賢明な利用」 (第9学年)
- (4) 「人間の理解」 (第10学年)
- (5) 「文学・音楽・絵画・建築・彫刻などに反映しているいろいろな問題」 (第11学年)
- (6) 「鑑賞のしかたをどう学ぶか」 (第12学年)

ここでは第10学年 (高等学校1年の)、「人間の理解」の単元展開例に考察の中心をおき、その他は必要に応じて参照していきたい。これらはいずれもペンシルバニア州の中学校、高等学校で実践されたものであって、アメリカの国語教育の現場の実際を知る上に役立つものである。

なお、ペンシルバニア州は、6・6制の学校組織をとっており、ここでいうセカンダリー・スクールとは、第7学年から第12学年までをさし、わが国の中学校および高等学校に相当するものである。

## II 国語学習の環境

- |       |                                      |
|-------|--------------------------------------|
| 一 単元名 | 人間の理解                                |
| 二 学校名 | ペンシルバニア州ステートカレッジ市、州立大学<br>付属高等学校第1学年 |
| 三 生徒数 | 28名 (女教師)                            |

### (A) 生徒

「人種のるつぼ」といわれるアメリカだけあって、この第一学年の国語教室には、経済的・社会的・能力的に広範囲な広がりを見せられている。28名の生徒のうち、約半数が大学進学を希望しており、学習効果の上からは、わが国のスシ詰め学級とちがって理想的である。生徒の具体的な活動ぶりや、物の考え方は、IIIの「学習活動のすすめ方」で明らかになるが、生徒の能力に応じた指導が徹底していることは学ぶところが多い。

## (B) 教師

このばあいは女教師であるが(英語では教師 'teacher' をうける代名詞は 'she' であるように女教師がひじょうに多い)、年間の指導計画は、二つの章(一つは詩について)の作文テストを実施すること、サロヤンの「人間喜劇」(『The Human Comedy』, W. Saroyan, 1933)と、スコットの「アイヴァンホー」(『Ivanhoe』, Sir W. Scott, 1830)とを読むこと、といういくつかの最低基準を徐げば(これは州の教育委員会で定めてあると思われる)、自分の自由にまかされている。国語教師は教材研究にくわしいことはいうまでもないが、ただ生徒の学習を導くばかりではなく、生徒のよき理解者、助言者となり、生徒の能力に応じて、生徒と一緒に望ましい方向へ発展していく努力をしている。教室では、生徒の自由な活動を援助しながら、いろいろな問題を生徒に与え、あるいは発見させて、その解決をさせている。その際、教師がぐんぐん引っぱるのではなく、あくまでも、ガイドの役をしたり、生徒の活動を後から見つめているばあいが多し。しかし、生徒に関しての情報、資料はひじょうにきちんと整備しており、つねにそれを解釈し判断して、生徒を正しい方向へ導いている。

## (C) 「人間の理解」の単元をとりあげるまで

このクラスで、「人間の理解」の単元をとりあげるに至るまでには、二カ月の間、みんなで一緒に授業を進めてきている。これまでに、新聞・雑誌などが随筆のかわりに使われてきた。このクラスは、毎週定期的に行なわれ、自由読書が一時、自由作文が一時、ずつ設けられている。この単元をとりあげたのは、最低基準の中の

「人間喜劇」との関係からであろうと思われるが、教師と生徒は、一緒にこの単元を発展させ、教師が望ましい方向だと感じた方向へ導いていっている。教師の指導のもとに、生徒たちは、人間の価値に気づき、より深く理解するように、短かい期間ではあるが、探究的な学習を行なうよう努めている。この「人間の理解」ということは、人種の国アメリカでは、わが国では想像がつかないほど切実な問題であり、そこでは、個人的・民主的価値や、理性を働かすこと、個人の責任などということが強調されている。

## (D) 教室

教室内では、ポスター・模型・絵・写真・パンフレットその他、教材などの掲示や展示も行なわれ、映写・録音などの視聴覚設備も完備している。また、教室の内部は、個別学習、グループ学習、円卓討論会、自由討論会、展示会など、それぞれの目的にしたがって自由に使っている。しかし、わが国のように教室のみが国語学習の絶対の場ではなく、講演会、映画会などのときは、合同学級となり、図書館、講堂などへ移動し、さらにまた、学校外へ見学旅行、訪問、インタビュー、観劇などに出かけることがしばしばである。

## (E) 教材

教室で使用する教科書、参考書、読書教材その他必要なものは、地方教育委員会から無償で貸与されている。わが国のように、「国語」というような総合的な(いささか文学的傾向が強いが)テキストはなく、Composition, Reader, Speech, Spelling, Reading Skill などに分かれている。教材の用い方、とりあげ方もま

つたく自由で、新聞、雑誌、パンフレットはもちろん、フィルム、テープ、写真などがよく用いられる。また、生徒自身が、ポスターを書いたり、模造を作ったり、絵を描いたり、創作したりして図書館に入れたりする。学習を進めるばあいには、教科書中心ではなく教科書を通じて行なっている。つまり、教科書の内容を学ぶのではなく、教科書によって、何を、どんなふうに学んだらいいかを勉強するのである。なお、補助教材としてのフィルム、レコード、テープ、参考書、読み物などは、NCTE（全国国語教員協議会）から豊富に出され、使用には事欠かない。また、生徒の手によってパンフレットや新聞記事などの収集もさかに行なわれ、それらを配布したりして自由に使いこなしている。では、次に、このような国語学習の環境の中で、どのような活動が行なわれるかを見てみたい。

## Ⅱ 学習活動のすすめ方

### (A) 単元のとりあげ方、

アメリカの国語学習においては、生徒がよりよい個人生活や社会的能力を達成することができるように、生活に密着した、必要にせまられた単元がとりあげられている。単元の展開も、教師と生徒と一緒に協力して行ない、柔軟性のある生活単元学習を行なっている。わが国の単元学習は、いかにも画一的で、生徒に押しつけている観があるが、この点は大いに学ぶべきところではなからうか。

### (B) 学習計画の立て方

どんな単元のばあいでも、教師によるオリエンテーションがあり、ついで教師と生徒とが協同して計画を立案する。教師は深い教材調査をしなければならないが、教師の側の一方的な計画立案はほとんど行なわれない。このことは、生徒の教材に対する自由な近づき方や学習意欲を起させ、教師が考えてやったり、教えてやるのではなく、生徒が自分で考え、柔軟な思考力を養うことができるようになるのである。このことによって、生徒自身が意見を明確に述べることができるようになり、学習活動がひじょうに面白いものになるのである。

### (C) 学習目標はどのように定められるか

単元の学習目標は、生徒の関心や日常生活に合うもの、個人的適応、社会的適応に必要なものがとりあげられるが、わが国のばあいとひじょうに異なっているのは、生徒と教師が協力してきめていることである。もちろん、教師の目標はしっかりと立てられており、教師の指導によって、生徒の関心や目的を考慮に入れながら、生徒の目標が立てられていくのがふつうである。また、一つの中心目標をかかげ、さらにいくつかの補助目標を設けるばあいもある。「人間の理解」の単元の目標は、

- 1、クラス学習をできるだけ効果的にする。
- 2、生徒のあいだに民主的価値のより大きい自覚を創る。とくに個人の価値に関連させながら。
- 3、いろいろな事態を処理する際に、理性を働かせるようにする。

- 4、グループ内での個人の責任を實現する。

とあり、言語能力を高めることは、直接には表面に出されていないが、いろいろな作業を通じて、獲得されるようになっていく。

(D) のような学習活動が行なわれているか

この単元は、サロイアンの小説、「人間喜劇」を読むことから始め、その批評を書いたり、さらにかれのその他の作品についてレポートを書いたり、各自が、その能力に応じて思い思いの活動を発展させている。以下、学習活動の具体的な内容をあげてみると次のようである。

(1) 全生徒は、サロイアンの小説、「人間喜劇」を読んできた。

各生徒は、それぞれ、この小説についての批評を書いてくるようにいわれた。クラスは、この本を一冊のアメリカの本として討議してきた。生徒たちは、作者サロイアンの意図は、「働く人々の価値を明らかにし、すべての人に機会が平等に与えられており、アメリカは各人種のつばであり、人間にレッテルをはるべきでないことを示そうとした」ところにあると考えた。生徒たちは、一番すばらしい人物として、グロイガンを選んだ。

(2) 数名の生徒は、サロイアンの他の作品についてもレポートを書こうと申し出た。たまたま、一人の女生徒によって、この単元に推進力が与えられた。とつうのは、サロイアンの他の作品、「人生の楽しみ」(The Time of Your Life, 1939) についてのレポートの中で、彼女は「もちろん、わたくしたちの町には、こんな人物はいないと思います。しかし、読んでい

たいへん楽しかったと思います。」とまとめていった。

するとジャックが、「こんな人物がこの町にいないなんていうのは誰ですか。ぼくたち自身がこういった人間じゃないでしょうか。こういう人たちは、ただルンペンや、環境に順応できない人々の群じゃないと思います。かれらを知っていれば、きっとぼくたちとひじょうによく似ていると思います。」といった。

ジャックは、かなり負担の重い読書計画に、いちばん最初に音をあげる生徒であった。かれによると、読書の際、十分辛抱ができなかったということである。しかし、ジャックも、他の生徒も、全生徒がどれだけ人間や、人間の特性を意識するようになるかを、もう二―三週間、時間をかけて見てみることにした。

(3) クラスの全生徒は、各自それぞれのやり方で、ある作業をした。生徒たちはしばしば小さなグループに分かれて作業をしたが、各自はそれぞれの読書計画を發展させた。また、クラスは必要に応じていろいろ書いた。全生徒を、偏見テストのために、カリフォルニアのロングビーチへつれて行き、その評価をやった。全員、詩の章を読み、それから各人詩を一つ選び、自分の選んだものを発表した。講演を聞いたり、「わたしの往んでいる家」、「境界線」、「ヘンリーの裏庭」などの映画を見たりする共同学級活動には、全員が参加し、グループに加わって討議した。各生徒や、小グループは、学期末試験の代わりに、特別な単元を計画し、その活動を遂行した。これらのうちいくらかは下に記してある(E、特別活動の項参照)。全員、

学校図書館の目録に加えるために、グループ間教育についての資料に原稿を書いた。

生徒の書いた作品 (「人間の理解」に因するもの自由選題)

生徒名	作品名
Angelo	「おんどりクアラ」
Beams	「二人は仲間」
Bishop	「バンクーキ」「中国人の五人の兄弟」
Bontemps	「悲しげな顔の少年」
Buck	「隣りの中国人の子供たち」
Clark	「小さなチンパホーの青い顔」
De Angelli	「輝く四月」「バンクーのクザニア」
Enright	「Thimble Summer」(?)
Estes	「百枚のドレス」
Fitch	「一つの神」
Gates	「青い柳」
Granick	「走れ、走れ、」
Handforth	「Mai Li」(?)
Latimore	「顔は花ざかり」
Lawson	「かれらは強く正しかりき」
Leaf	「よりよくしよう」
McVloskey	「ホームラン賞」
Means	「偉大な日の朝」
Seredy	「釣り合いのとれた姉妹」
Sharp	「主キリスト」「ピーターの木」
Swift	「To be」(?)
	「北極星は光っている」

Whitney — 「朝の丘」

書くことは、この単元の初めごろ、「人間の理解」「偏見」ということばが、どんな意味をもっているかを定義づけようとして始められた。ことばの概念があまりにあれこれ出たので、教師は、生徒に一週間の、そのどちらかのことばの使用例を採集、記録するようにいった。第三者のそのようなことばの記録例は、これらの概念の基礎的な共通理解において、得るところが多かった。毎週、クラスでは個人の読書向上レポートやその他の個人的進歩を発表しあった。

(4) クラスの各人は、外部の源から、この「人間の理解」の単元に関係のある資料を集めて追加する仕事を、責任をもって引き受けた。

(E) 学期末試験の代わりとして行なわれた、個人や小グループの特別な活動

(D) のような学習活動のほかに、次のような学期末試験の代わりとして行なわれる活動は、試験に対する考え方がきびしいわが国では、とうてい考えられないことである。生徒の能力や興味に応じて、学習指導を進めていき、評価していくことは、いかにもアメリカらしいところがあると思われるが、また、わが国で学ぶべきところも多いうちに思う。これを、わたくしたちのクラスに持ちこむことによつて、生徒はどんなにか生き生きとし、各生徒がそれぞれの力に感じて力いっぱい活動をすることであろう。次にそれらの例をかかげ

てみる。

- (1) クラスの中から、それぞれ異なった宗教を代表した一団が出て、自由な討論をした。
- (2) 4人の女生徒は看護について、みんなの前で自由討論を行ない、また、町の看護婦たちをインタビュしたり、看護についての本を読んだり、文献を取りよせたり、現役の黒人看護婦の貢獻を調べたりした。
- (3) スタインベックの「真珠」(The Pearl)を読んだジャックは、ぞっとするような卑劣な人間を、実例的な授業に従って長時間研究することに興味をもちはじめた。(かれは、大きな誇張のある事例を發展させるために、何時間も時間をかけた。)かれはクラスで何回か報告をし、「以上は、このような山岳地帯の登山家たちへ、卑劣な人間についての忠告です。」という文で、いつも結んだ。
- (4) 内気な性格のラリーは、教師の指導で、作文教科書の各章について客観体テストの実施と採点を行なって、自分の採点方法の分析から、それが妥当なものだったといった。
- (5) ナンシーは、六歳の妹の興味をうまく利用して、子供のどんな本が、子供の理解の發展を助けるかを見た。
- (6) ある男生徒は、ハヤカワの「行動における言語」や、「社会行動のための国語」の中の「教室の意味論」を読んで、クラスで報告をした。
- (7) 一人の美術に関心をもつ生徒は、同級生や先生が持ってきた材料を利用して、毎週新しい掲示板の展示の係りを受けもった。

(8) ある生徒は、クラスで名画が候補に挙げられた生徒たちの中から話し手をきめる役を買って出た。

(9) ある少年は、映画、スライドの教師として仕事をした。

(10) ある少女は、古くからこの地に住んでいる人にインタビュをして、ラジオ演説用の訪問記を書いた。

(11) 数人の生徒は、劇についてレポートを出し、その劇の部分を朗読した。

(12) あるグループは、クラスにポスターや標識などを作って供給した。

以上、(F)の学習活動を、「読み、書き、話し、聞き、観察すること」の五つに分けてみると、読むこと——「人間喜劇」「アイヴァンホー」を読むこと。毎週の、「読書向上計画にもとずいて読む。自由読書。詩・劇の朗読。新聞、雑誌、パンフレットなどを読むこと。

書くこと——「人間記録」の批評を書くこと、他の作品のレポートを書く。本の要約を書く。(F)生徒の作文例参照)。自由作文。

「読書向上記録」を書く。図書館にはいるため全員創作すること。(D)参照)。「人間の理解」「偏見」ということばの使用例を記録。文献、パンフレットをとりよせる手紙を書く。絵、掲示用ポスター、テストに記入、など。

話すこと——「読書向上計画」の発表。書いたものをクラスの前で発表。パネル討論。インタビュ、その他。

聞くこと——講演会、討論会に出席。他の人の発表を聞く。テー

プ、その他。

観察すること——日常におけることはの観察と収集。授業の観察  
社会の人間の観察など。

以上の五つの言語活動の中でも、とくに読むこと、話すことに重  
点が置かれている。次に生徒の具体的な作文例をみてみたい。

(F) 生徒の作文例、(書物の要約)

「人間の理解」の単元のまとめの段階で、教師は、各生徒に、自  
分がやったこと、自分が読んだ本、などについて、まとめて書かせ  
ている。アメリカの生徒たちの、書く能力がすぐれたものや、劣っ  
たものなどが明白であり、その能力が広範囲になっていることは注  
意すべきである。また、これら生徒の作文を読むことによって、以  
上、見て来たことでは汲みとれなかった学習内容や、アメリカ高校  
生の物の考え方、読書量などを如実に知ることができ、興味深いも  
のがある。以下、14人の作文例をあげるが、生徒9・13・14の作文  
の例はひじょうにすぐれた例といえよう。

生徒1 サロイアンを読んだあと、数冊の本と、雑誌の記事  
と、新聞を読みました。いま、「アイヴァンホー」の半分を  
読み通しています。人間関係についての映画では、「紳士協  
定」と「鉄のカーテン」を見ました。

リーダーズ・ダイジェストの隨筆を数編読みましたが、いま  
名前を覚えていません。

生徒2、数冊の本を読みました。それらについて、二・三の

題でレポートを書きました。ポスターを作りました。

生徒3、子供の本を一冊読み、二・三のでき事を先生のとこ  
ろへ持って行きました。わたくし自身、よりよく人間を理解  
するよう努めています。

生徒4 サロイアンを読みました。ハヤカワ一章について、  
報告をし、いくつか所見を書きました。他の人が人間の理解  
について発表しているのを聴きました。

生徒5 「人間の理解」の単元について、これまで次のよう  
な本を読みました。「人間喜劇」「身分」「月は沈みぬ」  
「盛夏」「アイバンホー」「地球が逆転するとき」など。ま  
た、「われら三人」という隨筆も読みました。

生徒6 わたくしの最初の課題は、映画を写すことでした。  
まあまあうまくいったと思います。二番目の課題は、すっか  
り崩れてしまいました。学級の仕事としては、出席簿を保存  
したり、紙をくぼったり、図書委員の仕事をしたりしました。

生徒7 「人間の理解」についての研究課題で、本やパンフ  
レットを何冊か読みました。いくつかの活動を観察し、人種  
差別についての討論会に出席しました。人種差別についての  
クラス討議にも加わりました。ナバホー・インディアンにつ



いての話を聴いたり、人種差別についてのアンケートに書き込みをしたりしました。クラスの図書委員としての仕事もしました。(とはいっても、あまりしませんでした。)また、サロイアンの本を二冊読みました。

生徒8 「人間の理解」について、「人間喜劇」「白い塔」「地球が逆転するとき」「快活さを失った少女」など、数冊の本を読みました。掲示の仕事でドロシーの手助けをしてあげました。

生徒9 このテーマについて読んだ主な本は、「人間喜劇」「月は沈みぬ」「黒色」(ニグロ詩人の詩集)「ヒロシマ」そして、「スプリングフィールド計画物語」などです。

毎週の向上レポートや自由作文では、人間理解のいろんな例を観察しました。いくつかのでき事をとりあげました。わたくしが観察した人々の中には、中国人、黒人、大学生、高校生などがいます。

わたくしは、「民主主義のための読書、一九四八」というパンフレットに寄稿しました。

わたくしは、いま、「わが校における偏見を打破するにはどうすればいいか」という、自由討論会を計画中です。スプリングフィールドやマサチューセッツの学校でやったことを読んで、いくつかの考えを思いつきました。また、ニューヨークタイムズの少年少女欄係りに手紙を書いて、人間の理解についての自由討論会の計画に役立ちそうな資料を送っていた

だけないかと依頼してみました。

生徒10 「人間の理解」の研究課題についてわたくしがしたことといえば、本を読んだことです。「色の差別」(ニグロ)、「人間の種族」(金殿)、「閉ざれた窓」(ニグロ)「身分」(ニグロ)、「尾羽を抜かれたくじやく」(メキシコ人)、「楽しき天国」(貧富)、「バーティ君やり通す」(太った少年)など。また、テーマについての映画も何編か見ましたが、いま、「アメリカ合衆国の現状」だけしか思い出せません。「異った境遇で」というパンフレットを取りよせてクラスの人々に配布しました。

生徒11 「人間喜劇」「わが名はアラム」「ウェスレージャックソンの冒険」「父との生活」「母との生活」など読みました。日常生活で、とくに国語の時間でいろいろな観察しました。ラジオ番組。

生徒12 「人間の理解」の研究課題のため、「緋色の修道女メアリー」「マリアン・アンダーソン」「アダム氏」「わがアントニオ」「善きかな現世」「サビラと奴隷いの少女」などを読みました。その他はいま思い出せません。子供のための本、「小さなナバホの青い鳥」の一部を読んで、レポートを書きました。全クラスは、人間の理解の立場からの「文化間の関係についての信念」というテストを受けました。

生徒13

「人間の理解」の課題の中で、わたくしがした主なことは、子供の書物を調べて、子供が読むのにちばんいものをいくつか引き出すことでした。わたくしは、「子供たちの考えは、ほとんどかれらが見たり聞いたりすることによって形成される」という主な考えから、この仕事をやりました。七歳になるわたしの妹をモルモットに使って、いろいろな本を読んで聞かせて、妹の反応をテストしました。そして、次のような本が、子供の楽しみ読みにも、心の形成にも、いちばんいいという結論に達しました。「レマスおじさん」「ジョン・ヘンリー・ダビッド」「耳のたれた獵犬」「レザディアン物語」「メリー・ポピンズ」「逃げた少年」。「トランベット」「金色のタマゴ」の本などで、とくに「金色のタマゴ」のさし絵はよかったです。

おとなの本では、「大通り」「土音のこども」「黒人の少年」「動揺する因襲社会」「ヘビノボラズをやぶ」などを読みました。また、「人間の理解」に関するパンフレットや切り抜きを読みました。わたくしがしたことで、いちばん興味深かったことは、テーマについてのみんなの意見をきくことでした。たいていの人は、あらゆる人に平等の気持を抱いているようですが、いざとなるとなかなかこれを達成できないようです。おとなの本でいちばんよかったのは、やはり「人間喜劇」だと思います。ナバホー・インディアンの話はともおもしろかったです。

生徒14

「サロイアンの「人間喜劇」について——。「人間喜劇」に心を動かされたところは、アメリカの生活をわかりやすく、ありのままに描いているところだと思えます。サロイアンは、人間性のささいなことを戯曲化し、無理に強調したりしないで、ただ人間性の真の意義を明らかにしたのです。もう一つよかった点は、作者が、あらゆる世代、あらゆるタイプの人間を完全に理解していることです。ホーマーのおとなであることへの目覚め、ベスとメアリーの希望と忍耐、マッコーレー夫人の有徳の信頼、老グローガンの人生哲学などは、「ユリシイズ」の中をさすらえば明らかです。

サロイアンの描いた人物では、ホーマーが大好きです。たぶん、ホーマーがわたしと同年輩だし、かれの問題がすなわわたくしの問題であるからだと思います。成長することは、どの世代でも、多くの人にとってむずかしいことだろうと思います。しかし、ホーマーは戦争のためにおとなにならなければなりません。ホーマーは、家族を養う人であり、父であり、兄でなければならぬと同時に、死に直面しなければなりません。かれは、家族のためにのみ死ぬのではなく、世界の家族のために死ぬのです。かれは、メッセンジャーとしての仕事に順応するかのようには見えませんが、新しい仕事に強いられた人生観に、やむをえず順応していったようです。

第二十四章の「あんずの木」は、幼年時代を象徴するもので

すが、また、読んでもとてもおもしろいものです。こどもの「ゲーム」に対するヘンダーソン氏の反応は、おもしろいけれども、すこし悲しくなります。ヘンダーソン氏は、明らかに孤独で貧乏でした。これは、多くのかなり年輩の人々にあるがちなことのように見えますが、誰も、いすに深く腰を沈めて静かに物を観察し、おそらく自分自身にはほえみかけるときの幸福に気づいていないようです。

第二十五章の「幸福であれ、幸福であれ」は、やや理解しにくかったと思います。いったい、何が幸福であり、どれだけの人がほんとうに幸福なのでしょう。

「人間喜劇」という題は、すこし変だと思えます。もし不似合でないと思えば、それこそほんとうに人生は喜劇だと思えます。もっとも、サロイアンは、ベツとした明るい場面と同時に、多くの灰色や黒色の明暗を描いています……。ちようど、スペイン人たちが、「それが人生だ」というように。

## Ⅴ 評価はどのように行なわれるか

「人間の理解」の単元の評価は、

(1) 偏見についてのテスト、単元の終りに再び行なわれて、その理解の発展を見る。

(2) 学期末試験の代わりとしての、個人・小グループの活動の評価。

(3) 書物の要約(作文例)の評価。

(4) 毎週の読書向上レポートの実績。

(5) 教師が、教室での生徒の行動・態度などを観察する。

という、五つの観点から行なわれている。これは、主に教師の立場からの評価であるが、生徒による自己評価もしばしば行なわれる。

いくつかの単元展開例における、評価のしかたを分類してみると次のようになるようである。

- (1) 生徒による自己評価。
- (2) テストによる評価(口頭・筆記)。
- (3) 教師の授業観察による評価。
- (4) 作業、作品のできぐあいの評価。
- (5) 生徒の生活・態度・知識にどのていど生かされているかを見る。

## Ⅴ おわりに

以上、Ⅰ～Ⅳにわたって、アメリカの国語教室における単元の具体的な展開例を考察してみたが、その特色としては、あまりに文学的教材に片寄りがちなわが国にくらべて、やや社会的な性格をもった授業が行なわれているようである。しかし、言語能力は十分に伸ばしながら、文学鑑賞を深くやっており、その授業がひじょうに活気にあふれ、柔軟性があるように思われる。国がらのちがいが、来るものも大いにあるが、わが国、国語教育の単元学習のゆがんだ一面をてらす鏡が、これらのアメリカの単元展開例の中に見出されるのではないかと思う。

(一九六〇・八・四発表原稿、一九六〇・十二・二十四再稿)